

ウィズコロナ・ポストコロナの初年次教育

課題研究担当理事 山田礼子

【企画趣旨】

2019年以来、新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)が世界中で拡大してきたが、2022年春以降学校・高等教育も従来のオンライン授業一辺倒から対面授業へと戻りつつあることを契機に、私たちはコロナ以前の日常生活を取り戻しつつある。とはいえ、高等教育機関へのこの未曾有のコロナパンデミックの影響は甚大かつ計り知れない。2021年度大学生協調査においては、コロナ禍における大学生が不安を抱えている状況、とりわけコロナ世代の2年生の25%が人間関係に悩んでいるといった回答がみられるなど、大学関係者が注視していくべきことは多いと思われる。

従来、初年次教育は、高校から大学への円滑な移行を支援するための教育として、学業面での移行のみならず、新入生の自己肯定感を向上させ、大学というコミュニティへの帰属意識を持たせることで、人間関係を円滑化することをも目的とし、実際に寄与してきた。それゆえ、初年次教育がほとんどの高等教育機関において、普及し、プログラムとして構築されてきた理由でもあった。しかし、COVID-19の拡大による状況において、従来対面型でこうした機能を充実させ、貢献してきた初年次教育が、果たしてオンラインが中心となる状況において、どれだけこうした機能を果たし、新入生を導いているかについての研究やグッドプラクティスの蓄積もほとんどみられない。また、オンラインテクノロジーやDXの発達によりこうした初年次教育の機能をどれだけ果たしているかというデータも提示されていない。

現在のウィズコロナの状況において、いかに新入生の自己肯定感を支え、心理的安定に寄与し、将来への確実なプランを立てるなどの内容を展開している初年次教育は、今後の新入生が充実した大学生活を送るうえでの鍵となるのではないかと考えられる。

そこで研究としての蓄積にもなるような内容を深めていくことを目的として、課題研究委員会は、テーマ「ウィズコロナ・ポストコロナの初年次教育」を設定し、サブテーマとして、1) 自己効力感、自己肯定感、心理的安全性、帰属意識(所属感)、2) DX・オンラインとリアルな体験、グループワーク、3) キャリアプラン、ライフキャリア、4) 入学前教育、5) 教育過程や学修成果の分析や評価の方法 という五つを立てた。そのうえで、課題研究委員会として、2年間にわたってこのテーマを扱い、初めての試みとして会員から公募を行うことにした。学会としてこの課題に取り組むことにより、グッドプラクティスだけでなく、課題研究の深化へとつなげ、同時に今後の学会活動を担っていく人材の発掘に貢献することも目的としている。課題研究委員会による応募者の書類審査と面接審査、発表内容をベースにした打ち合わせを経て、次の3名が登壇した。光成研一郎(神戸常盤大学)、垣花渉(石川県立看護大学)、溝口侑(桐蔭横浜大学)氏である。当日の司会は山田剛史委員、指定討論者は濱名篤委員、山田礼子委員の二人が行った。